隨緣集

上

914.5
D34j

南伊達藩國著述

隨緣集 巻之

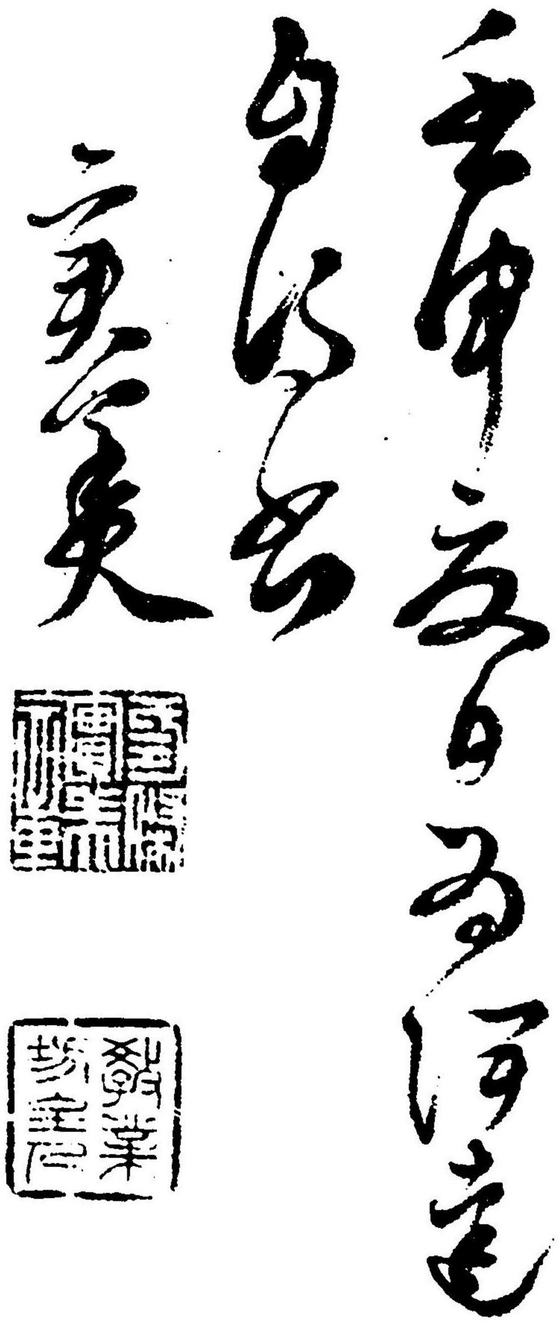
枯節

陸奥家義陽

国立国会
25.3.31
図書館

112557

914.5 D 34 g



先考潛心國典尤喜和歌嘗呈一
首於太政大臣三條公公既賡其詠
又贈此四大字先考深感知遇沒齒
不忘茲因合剞劂遺著數種石印以
弁卷首

明治二十七年十月　男宇充謹識

寧楽し。かりくたりては たえ〳〵も。ありけれど 詠しおかなし。
故 世の人も。ちかひとのよみぬ 著く多くなりて。その
後 まな詩 めでし学まつりき。伊達翁の集と 随録とし え
名つかりきまけ 詠やとい ほうり 田 だ とつかる きなるたる 色し。
をらぬ翁。翁もし ほとんど。紀の徴乃 澄まらつると うけて。かく
哥よりし 新し かるまくれしられん。いつの世 ぞ つちは。韻
波 ころりまたまりを しか。殊らく 番嬉のこはまきの 月
来て。かたやにく 才をはかり せるる神ろ。狂言体の紀と
くるしとこえ すくや めりはしまで。てきり力を 盛さる事。翁
山かしをりより。韻波 ならし 何まし。かくしそりけり。崇その

あらぬ翁は。歌のあるの。ぬきんのむやたる。中にろれ学者
こたる。今のうた学ぶ。ちかき 時を 何とつる。色かくも まう
せはなくもかなく。ある きり 句。なかりしく 得がる な
まて。翁集は今とよしろも。百家にそ見るる。我哉 新なるま
よしろも。我哉新を今めす 用めつ きるる。後いち々まつ
ねし 物を求めん。おのゝ衣も 学ら縫む。おのゝ 園殺も 絵
まはえて。絵ゝ見ても。そのほどいるま。その物を 及ぼるから
く知る 詠まれん。おのつから。翁のこころ おこして。翁の言葉
りてよき 語つる歌と おりもめ人に ちかつきん。かくてこそ。え
らる人のりしける。俺 彦右衛 尉の つくりぬ はいちかきを 留ま。

百つはるるるるく。はるをと耳くつーとりるるる。明
治のやるるのの七月のサるるる。京とのの山りるる旅や
るるとと。新宗 京るる本はるとの学るるる。新はるを
しるる一るる学一るるる。

追慕芳松

随縁集

あるーる世の巻

立春

菖蒲原の中川通原るちるるとみとと菊るむする云ふ茅時り
藤垣内翁云翁るる我師幸岳大平翁らの歌大をき詠
るてふるる立春の体を詠きり
松平忠敏云めてるるとと
翁をはめ人るの歌題を記しるるるのを
一つるる人の芳るを失ふ事をおるるを
一つるる自歌の面目をなきんとるる展撰

評論をみりて愚をまこと覆義
を沢大は好心を彼るの仏れ作て流ないて
阿容せんを法〳〵しうぬるもありて
試は記もるる也

山家早春

谷陰の氷津穂のほとけそめて若の篠は春風そ吹く
青木雅宣云淘句は春風を吹て四の句はのもて吹いを独るまて
う使は句あ作まこれて出巧ありと
云〳〵

梅

ち〳〵雪のふり里ないのかんはるの片つ思いらは出きはり
忠敏云めて出て一時
春の梅をの〳〵ひ
おの白梅の紅もむ雪ちは梅を有ぬ風を加
春月
山うすき雲の底は居ありて微月梅の新交あり
千種有明の四評はあ出て山うは
雲のそとといふ身つの底とふる深き
雲のはのきはあり

四評のくあきと時の作者加納諸平出沢伴雄
なども一回評議してやがて山うたまとい
深くこのみなるる山のあるるかきとうふ
いつのうかのうるる姿の残りなる程山うたま
と一句ほためて清る現前の気色よく
くこ伯くりわ中〜〜掬の句の底に居
まるのけてうるべき色は寸も変ぜるる
なきるる中合うり
此四の四評とハ千鹿ゆるうう時西行の
例なりひて三十六番自歌をつひひの

四評を清書し〜時の出判なると以下の歌
まつの四評と逆きるを皆比歌合なり
本居豊穎云初句ゆ急なるを食なれと
一ゆの上ようけ〜新屋のうけういなその
いひえぬ所なり
忠敏云下の句ゆ赤のうるて上ハ昼のさま
なき〜ゆ
かくいひうるを宵深き朧月夜ゆ
山なる色をもるる花ゆるや此雅事ゆ
うう品波初物を詠まるんのさま有へ

ゆきとおのきて故郷和歌山をいづる時
葛城をはるかに遠近の人海一山なびかぬ
初春月淑しるく松ちらほら霞の厚
雪を隨ひて山の濃淡さまざまなり此
題作あるを目前一段の風景を遠き人のた
ゆ諸作家の極みをつくして此雅い詠ひ
うつくし

春雨

梅の花ちるあるかちりて書よむ窓の花さきかゝる
忠敏云幽雅

歸雁

かすみまき荒れ山の峰こえていくよまで雁の鳴ふん
時歌舞伎座の幕開よく清雅なるよい芸能
あり時の俳者共同心なりと云む
豊穎云いとき潤ある歌四の句強き力
ありて歌いつるる姿まことよき句なれ
忠敏云四句いとふかくよきこゝろ
しらるゝ歌まことに歌きとゝ歌
みちゝて雁の花をみるとてくりを拾ふ
のゝ人るものゝさまとて趣ふかく歌うあるぬ

ゆちもてるハ僻耳まや
花ゆえくれの弱ゆたるまはしく又
雲をまの川降ゆるをハ人捨てゆくまあれ
くるのやまのはのとゝ花をやの川峰を
さる心をあく待ゆをうきゆ人四の句
ゆいはくまよ川や淺間の夕烟と添る

天外遊糸

むさしのやまてゆき宮ゆ少ゆる小品波ゆけく糸ゆ句
はるすゝハ武蔵野や里ゆきまゆの尾れ

ハくゝと待くゝを卿の印評は三句ゆ少ゆ
おとおさてさて品波ゆけてとゆまほし
ゆあゆいと面白く承をハ印評ゆをゝ
てあくゝあ

待花

雪くゝ風あくゝる花ゆ梅ゆ花の紅ほとくん

梅

ちくゝ花めくゝと思ふ神ゆの世ゆくれ有れ
諸ゆ云頃高く餘情限ゆ
雅宜云ゆ まのやまとゆをとくゝん

112557

かはひなひとつの形の下まとむと
かつ〳〵やゆるを

曙花

吉野山花ぞうつるとこの春はうつるやうをやむむ

盛花

櫻花ふまきうりと匂ふ日まちつ〳〵今ぞまつる形

忠敏云めて〳〵

山落花

ちるとの雪をはらはまくれて春を物のまこと雪の心

法ふ云摂政殿の風格いとめてあり

開花花

見つゝや花咲きそふ関岳の笑ひあつとめさうり

粧宣云三四の白いあつるある角つきかい

ありてなつ〳〵はるを〳〵をまつ〳〵力あ

忠敏云三句好ましく四句力あるのう

けつわさ〳〵ちつのをとをとをとをとをとき

ちるとおりはるや

両般の評語めつ〳〵と褒るをのく

好ましうふとと破けるまをの人やりの

世ちつるり俱ふはの知るとつ〳〵へつを』

歌をよいさゝかの論なりとて論者を對て
更に向ひ給ふ事非抑歌の風
調いとる上幽玄雄壯優艶玉なる巧なる
樣々の体裁工匠を論ずるに付きまあれ
されい歌出る一首の作をもつて論定を
取き事なり古への宗匠俊頼西行なゝ
いまも更なり宗匠の義理精密言上
超群の上をゝ家集よりてハ打まう
きて只ひとさゝ歌をよみ詠まるゝ作なりなむ
沖接とある撰集なりとあれ和のうに忘れ

と記しおく部必集を体裁なさもゝまて
始終一律をもつて少の変化なりさ
んいまゝは部集のあるなりさゝ
加式義花を一首の作を風体めゝ
うゝもの心のまへまて高上優美の宮和
を形なる飛ひ平亮詞奇調巧なるを以て
一ゝのあるとゝ物語中の和言よ似る
集中の一曲のゝ四の句い後の関嵐ゝまも
出まるゝものあれいなるの力なりを作て
をゝ叶さるれなり若此句平情なるを

はるかの人ありんんと高山の頂にねむ
きの花を以て造る花を論ぜんとするきい
たるこうよりて高く奇を求めて
奇なるに巧を弱して巧なるにそれて
世界の皆なるもたるきき
前論なるもたるに拷問出てすこあれ
昔征韓の役に小早川の先陣明兵と戦ひ
て押えられを軍まで拷問義
栗山備後に向ひて小早川の先陣にうてれた
りなといはれるに栗山はあへさうれ
ものそれ毎にうつかへてうやかへ
の家陣を軍の花なりとなむ
答へて事なるとなるこの
関山花と集中の花とあるやもむ
直川といふ宮の山寺のうんるゆきて
山なるの夕をよ花れはちるに風まらきよなり
古郷山吹
おりひ出て井のふるつきて花姉を似そ山吹咲ること
つの陸沖よいひ人れと咲をて
諸平云勿論の風雅とうるる

忠敏云流麗

雅宣云ものさびて山路をゆくを
を萬葉集の歌の心なり家とゝ
いはれるいと行ちといふ

藤

松蔭ふるさの苔むす遠浪のゆくへ捨てゆく

首夏

南のこゝをはるむる吹ゆを心ゆゝ夏ゝきぬやう

雅宣云ひのをもむしろとふるまたなれと
南をゝもむかゝとゝるいとゝやはは

ゆる

以前いはれるはむしろとゝかりやゝ無
とゝゝるゝ詠所をはめて全く必自遠
ゝゝ有ゆむさゝふ初句新面とやゝとゝ思へ
とゝ南の宮以前ゆるゝていと大切なれ南や
凡おもむろゝもちをゝとゝや改をき

緑樹連村暗

いゝゝ若葉の木の川並の里つきゝゝの色ゝ一きゝ陰ゝ

忠敏云めてゝゝ

初子規

夜波の広のかりほまをつれてまをを弱さぬかをきひくる
いの宮御ほうを夜波のかりほまを合なは
春い浮弱りをを止下掛合さられ
宮御ほうの御きを時の作業をを一回申ていく
夜波のいのの申母まをの弱りをを
時母のをを夜ををを打申をを花ハ
母ををてまを弱さぬをを人を雑ものや
御ふんをを今をれいをををものを
をををを伝る
浦母紀

時ふをを舟い月ヶ夕汐をのを母をきを沢を好
忠敏を紀ををを

菖蒲

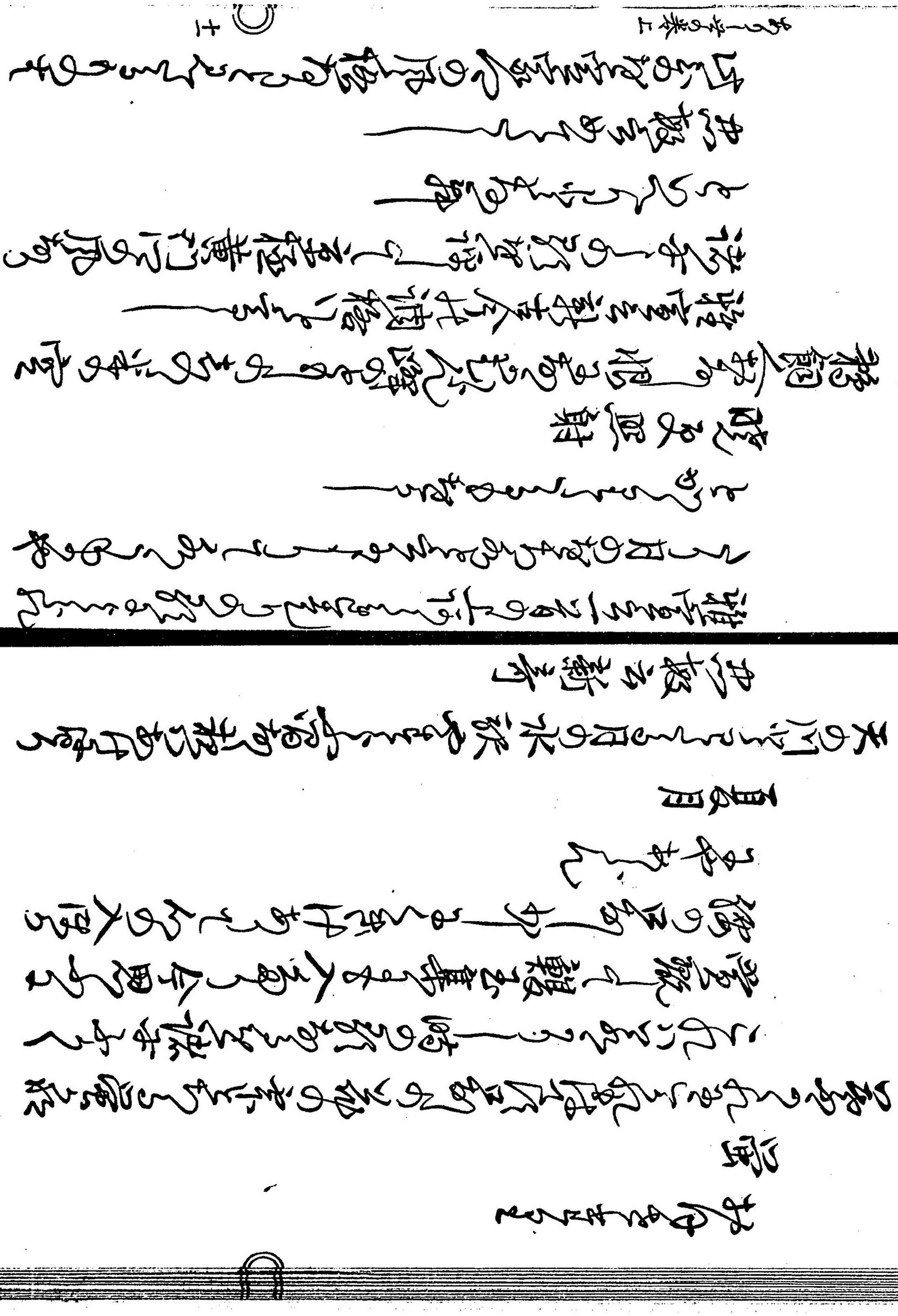
賤のををうき沼のあをめ根今の寿のをハひく人をを

早苗

初をきを一を広寿を弱時の寿をぬををとるを人を於
忠敏ををの白弱仆のをを紀

五月雨晴

さつき出をを名く桜の一を広を日をを雨のをを注を
いの宮御ほを霖雨のをれをのをををを公



おなじ所

螢

[illegible]

これいにしへ[illegible]時の[illegible]を[illegible]

賞歌して[illegible]玉集まる入[illegible]今思ふ

[illegible]の[illegible]

[illegible]

夏月

天の川[illegible]月の水[illegible]

出板云新奇

雅宣云一首の上[illegible]

[illegible]月のなかの[illegible]

[illegible]

曉更照射

稽飼[illegible]

雅宣云新古今[illegible]

[illegible]

[illegible]

出板云[illegible]

[illegible]

諸平人なり彼いふ所古今の活処を含
しられたるものなるを忠敏ゑめてこれと
いふべきものの同じく彼の風格とすべき
をしらさるなり
因ていふ抑此集は石原正明ものする千
載い同中善薩新古今は果上如来といふ
べく超群越格の手腕縦横自在の作略実に
企及べき源なり唯世に作家と称するもの
も桟不離位底の分にとどまるに同じくして
さらに入りて第一義三昧を得ることを難ずる

所蓋情解之者語益工而旨益昏言愈
奇而理愈昧とあんに集をよむべきものなり

初秋浦

鶺鴒なる杉の浦の夕月夜かのめく波の秋風そふ

忠敏云雄偉高調

秋といへどいつる葉りて吹風の桐の一葉を見さそふむ

忠敏云風致流麗

七夕雨

雨空雨ふるる後とての川舟のいそく例をやるもむ

ひの巴波は二三の句をつゝ思ひよる

野薄

うゝ人のいゝ所のすゝまぬ波を八波は鞭うつ絹を者なり

ひの巴波は波は鞭うつ絹を者なり

みをゝあゝ沢

忠敏云豪壮新奇

月前虫

寂ちるまきちるの月新更ゆはゝ寂まゝ社ちゝ八明を

忠敏云雄偉高遠

十六夜

心ありていまゝ月ら打まねく尾ゝ尾ゝ袖をとゝひゝとゝさめ

諸ゝ云尾花袖一興あゝ

忠敏云幽光

深夜月

何ゝまねゝもの撞のひゝゝふゝ今ゝゝ月八角ひゝとめをれ

はゝゝをゝゝゝ和白いゝゝゝゝゝ信ゝゝゝを

ひの巴波は何ゝまねゝ事日さゝふ八

下句人ゝゝゝゝゝるゝ新合ゝゝゝゝとあり

巴波感伏則あゝゝあゝ待ゝ色

忠敏云めゝゝ

川月

ちとせのみ井杭ながらけて神代にも岩根さびてある月の影

忠敏云雄偉

雅宣云井杭の〳〵丹の萬葉の歌をふまへ

ゆたかにて〳〵

閑庭見月

月かゝる淵茅の宿をてらすとてあつれ家よの秋をみるかな

忠敏云幽玄

河霧

大井河井せきをかゝる淵霧の岩の杉の高く也ける

いの口評は所よりこゝにみてれば〳〵出るとうよ

叶ひうゝや

時の作者は云ふ所ふくこゝ家の山のもち

ゆふかけて立南の川の錦なりの格なるべ

雅宣云何〳〵ふく所家の山のもりみちを

とゝへる風格をうけて文よりつきを出

らきてゝるゆゑ所謂換骨奪體と称す

ゆゑ〳〵

秋風

秋風〳〵ゆふかけをたゝめかんかをかけるゆゑ袖をふくあり

雅宴の初二句のはのいろの関の岚ふく
あるゝひゝてけりとあり
風もちる力あるまでにねをはを重ねる
一四の格を調ぶるまのなり者となり
ていうるゝこのめもとみて百そゝ一首ゝもむ
もゝゝん

鹿

宮ゝのはゝゝ大方の秋風ゝたゝへて昭雅庶の彩
近蔭芳樹雲の花ゝ鹿をてゝ山あし
めしゝゝいるゝ昭ゝ花ゝ山ゝ

はゝゝゝの宮ゝふゝ風のゝゝゝはゝゝ音を
たゝのゝの片幻さゝゝゝゝゝゝゝゝをあやゝく
ゝ鹿ゝあゝをゝるゝゝてさひゝさゝ一はゝ
とゝふゝてゝゝゝゝ庶の音をゝあるさゝゝ
ゝゝる作ゝ変ゝ調ゝゝゝ根本ゝ秋の
ゝゝゝゝ作ゝ花ゝの秋ゝゝを結ゝゝ秋ゝの
さゝをゝゝの声ゝゝゝ秋ゝゝゝゝ
月ゝ作ゝさゝあゝゝゝゝゝゝ川ゝの作ゝ面
首の餘澤ゝ流ゝゝゝゝゝの形ゝ
この論ゝゝゝ短長ゝ浪人の淡擇をゝ

へきこゝろの欲なくして面前阿容して
背後は違却をんい知己の幸こゝに殺伐と
なりて所存はを陳ずるに
風前紅葉
うきもゆきうは自ふ一ほい岩のそむる紅葉ふ人ひ了
ひの四海なりつゝぬ姿なり
忠敏云新奇
粧宮云ひつゝとなるへき岩なして紅葉ふよ
力なりさもゝ変化をのとゝへ
暮秋山
思ひうね秋のゆくへをなのむれいさ山水云出ちあれふる之
此歌出来のはめうもゝ人ゝ称て秀逸と
宮も本望面目之頗自讃之氣味集中
よ於て曲欲の思なすり
豊頼云解蓮法師ゆをうもて感
者ゝ
深山暮秋
宮理山秋ゝつめゝりみちをふる雪社をきちをあはれ
忠敏云深山の景況をまのゝ様
初冬

新潟の飯つ祝ふ大年の神の降臨まの高いきはり
忠敬こめてわたく
神世月の間の神達出雲へはこひ祈りて
いつ事ハ〜もふるき時よりいひ来りて祭ハ
夫木は社頭初冬具民の欲る今ようハ
四方の風 万の神等月いつこと旅のこゝめ
到〜むとこゝ元こゝ近き代の事なきく
こゝ元さ〜こゝ実事なるぬるもとそや
さ〜もと古き清なる必実偽をこゝ正し
添む例なれハ今こゝを思ひて

空翔り神やこゝ降臨あきて世のもち帰とこゝまる
忠敬こめつ〜

雅宣こゝ古き清ハさ〜こゝもちてこゝ偽を
論をこゝ欲よこゝて清へむとそこゝる〜

朝時西

間なりける郭の板を新戸出の神ハ祭りて祈ゆく時西ゝ形
家の欲合のこゝ有こゝ諸本剃こゝ新戸出
の祖はめ智こゝ入りまみちこゝてこゝめこゝ
次は初二白の気色まきめるこゝ地
下白初の〜はこゝ清さ〜こゝまいこゝ

[illegible]てといはれる朝戸出のよくひらきて
をのしくまなかれまおほえたり落葉
及ありし　此番花の多の山田面恵田のと
時雨くゝ高の月ひまこそ見て降くれる秋
岡時雨
[illegible]時雨にて橋のひてる高ふ秋日さしなり
忠敏云今しまもなをう
月前落葉
[illegible]木の葉の雨は山さきて岸をの月の秋分
忠敏云高家注

野霜

[illegible]の梅は[illegible]甘菜の[illegible]菜の[illegible]

木枯

[illegible]の萩ハ[illegible]ひよ[illegible]本の[illegible]の声
[illegible]て投[illegible]の如諸平伴雄をもめ
一回秀逸の由申注
芳樹を垂水ひく八吉[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

忠敏云新奇絶調

冬月

更る夜の影さへさやけき月みれハ雪霜より社寒かりけれ

雅言云深夜の寒く月さへるをすむこゝちに

川寒月

打よする佐保の川辺の浪とめてすめるかく夜の月なる哉

忠敏云高遠

千鳥

みよの京流るゝ川の遠ざかりなくや乱るゝのこゑいとむ也

忠敏云雄偉高調

雅言云いつゝ川の古事なとをおもひよせり出しゝきこゆるそのなるへし

夕羽振波をあまして隼人のさつまのせとを千鳥なくなり

雅言云千鳥の歌ともハ数居為の名されハ海辺のあの沖つ風のふきまさるをはなれく吹来るなといふ遠き国の勢を叶えたる津方の瀬戸やとこそ見てはへりなとこそ侍へし

忠敏云雄偉非凡

吹風とね松にまきれて須磨の浦風の絶ゆる乱るゝなく也

けふハ大平為の門に入りあて二とせはつゝのほと

の所なり箱根と面白しと賞歎あり一帝
諸国に流れさりきそをいつるとゝろみよる所に珍奇
なつゝきて特法に教へらるゝを諸国に石東
正明の役を務ひて此の風俗をとゝろこは
さゝ山あり吹ゝ吹ゝ吹ゝ松まきれて
芝いひ風のさんまといひ上下よく掛合て全く
彩屋の風調なり此箱根はさきぬるとゝ杉の
ゝゝを吹ゝをよ吹ゝ時の山をと
なるやゝの俳を孤ら祈なりさゝもの
大宗匠此境界に坐在さゝきゝ怪しと

なるやゝまるゝんさゝ風流子のゝ多ハいゝ
技不離位座の作意ゝて薩摩の彫刻な
さゝ次て峯へきものゝゝねとゝ昔の志
いゝきゝなん

水鳥

鈴川の玉藻の床やゝ母るふんきのをねをて眠れる

野行幸

右尾ゝの猪そゝるゝ多る座のゝ薩摩今ゝるゝゝむ

狩場霜

風ゝゝ蘭笠なひきて引放つ矢田の廣地よ何まとゝる

忠敏云雄壮高調

豊頴云鎌倉の都〻の矢あ〻つ〻ろふ
まのゝ〻より田〻ひよ〻れる所
こゝて又たゝかふ事かゝ小さ
いふなゝやゝ披露の時法要出一日
の評判もこゝてあゝの

初雪

松の木に岩はる杜切のあ〻ら新の作の名さもの雪

忠敏云流暢

炭竈

すゝこのあるは烟の多ゝ所より奥浮世の匂り
芳樹云上句はる烟の月にれと何まま
ほ〻と見ゝたるもまさり

出敏云高逸

早梅

窓の外ハ梅咲ゝるり相次桶おるゝ袖まるる匂ひ
御の四海より桶の中なる焼すの名さへ
おのれゝ〻さ〻ゝ〻らもてなこの〻』
四海の〻あるゝ此方の面目あ〻ゝ要
且和二の圏績なを出さる者いろをむさて

きさ吹きさもめ高のとゝめ詠さり
しを法平の調法にて高のおいと改め
こゝ八の字を孫子ることと成倍ふんよりも
おりめる古先達一字の上すを吟味精密
廉貶懸隔の説あることとうへるもの

埋火

孫子て伊なき叔母の埋火ひとりさうるおとは

待春

老くの法りゝ八つもれ若葉寄手あんてまさいまちん

天

天の京都の緑まさ秋こうつをふうるぬいこんやり
忠敏云めて高しゝ

月

もゝ雲のはもあく雲の月これ心はゝ八九のゝきこりゆり
出海云めは高

雲

うゝなき浮雲の人はこゝろいかさるぬやふふん
ゝの出神はうまの人とひゆくゝさるぬなひと
をうゝうとりかゝる抱こゝ人のゝ八ゝ雲の
こゝんとおりんるる仰つのもゝうゝ法や

打いひさまを何ともなく

世の評判よりて後る詩 うつ[illegible]

[illegible]の人のかさりもなきもの[illegible]

風

事しあきハ沖の白帆感[illegible]風て海路の守りなる

ほの白き汗下白力あて雪也この蒙古襲来

のうすも思ハれていとめてなし

木の海やさ戸の長浜西ふきて浪の音高也てもるむ

紀の川風あるよりる沖を長浜といへり

富士

不二ねの雪くれなゐる白ゆ也しやゝ紫色の海を出て華

雅宴ニ雪の多を紅といふるもおのつから

実景を求めして巧なる

吉野山

奥ふかく志ぬるもなゝ三吉理のいるくる人山ゝ

法華ニ餘情限なし

有田山

橋の八重ニさかきる阿弓山ハ黄金をつめる沖の白倉の

阿弓山ハ今の有田の古名なり

箱根まて

杉の葉の宮ひやかなる景樹詠八重霧の山をそなる

忠敏云めて〳〵

富士川

〳〵山の水のきちよ冊うひて旭る旬ふ雪をそんる南

芳樹云打ちてをそて其山とよこいひてこん事なら

ぬこちひて〳〵富士川のかてを雅なる歌を

豊穎云こを万葉の詞をそ中〳〵用られてるら

作者の本意をてめて〳〵き也ちを〳〵富士川の

とをひかいなそその調ちるを〳〵但此詠ハ歌ハ

富士川と〳〵あるよりなんてのを不題のさま

ハ学きてるかんこをりと実地をその作ある

をををハ特詞まの体ハ富士川をとある〳〵

されハ前のことき論きんきまあ〳〵以

俗の立評ハ其山の水とんる万葉の詞のおの

つの〳〵匂ひあひてやこりきてめて〳〵こそ

諸平云山の名川の名をいひ古歌の詞をけ

うハ名を那〳〵ふる作をむ巧ハ力あるこへ

忠敏云めて〳〵

此一ハ〳〵芳樹の評ハ宜おのつむ一箭鵰を落

きりとさるを衆評のこのをく鎗ひ倒ハ刺ハ

似あり千度ハおのゝ歌をこゝにとゞめて只管
坐観成敗 呵〻

あゝのはゝ汐見坂を越て

山松ゝ浪のゝきを打そへて月ゝ送る潮の一日風

忠敏云めゝ

淀川ゝ

牧方の堤ゝ有ゝ名月ゝ

諸平云縣居翁の調なゝ

ゝふゝて伏見のゝ牛ゝ

芳樹云おのゝ淀川の行ゝ幾ゝ

ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

芳樹の叩ゝ

ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

海

船ゝ

忠敏云めゝ

ゝゝゝゝ

川

洄とあり瀬と書きても明日香川昔の波ハこへてこそあり

此の此評に飛鳥川の洄瀬定めるハふりたる
事なれど下句の力にてめづらしき佳作
諸子の説同評一般
忠敏云めでたし

羇中川

富士川やあらき瀬のみなれ棹なほもみてこそわたる

此川東海道第一の急湍とて渡舟の棹ハ
太き竹なるの弓のごとく撓みてさし行さま
いとすさまじかりきこれハ居士の見たる時の
景況なるべし

旅泊

揖枕袖にかゝる涙見えかよはぬ夏比浪のしら波

此歌顕云新古今の風調よくも詠得られたる
ものにこそ
此評につきておのれ思ふところハ得なき此大字篇
の家の会当座探題の歌にてこれを出し
たまへはいとめでたし此歌篇をもてそれ自餘の
作者も損改なくこそ出しかれなどききたり

くれゐたりしのそもむかしのものよ
忠敏云めでたしこれ四つとそぬるのとてハ
いうまでもいへりこの況さまるやうめとこの
ようハぬと云ふる古今をきくるいと巧と
以前法評一定の上ハやもてく改こと
吉野の塔尾の陵すて
原中ハ岩つ所門ふ人くこんて歳ゆへるん 行幸の山
同一時雨井橋をあてひとり橋の忘咲ふ
くの山今ふ雨井の名をとめ
忠敏云懐古感情物の
紀弾の職まて殿ふ浪ひて江戸より福ゆる時
富士川水出て吉原の驛ふやくきりゆるあ
朝川のさまくんとてやまそのくくきゆとふ川辺
ふいりてゐ波ふ名ふおゆ早漕のみこの
まてらくく渭ある漕松ふるくくふきつ者
いの九ふ根ふやくよりも汁ふ
いまくつ汐ひきとめて水ふ逆巻波ふ袖ふ入る形
芳樹云をしもらくく向の岸ふ仇ふの楯
はきふ並へてくおきふ
雅宣云ふ名のきわきふくくもてて

いとまをしきいでたちかへるまうこの
打むらもんあるとなれこえさらしは

長歌

言靈所

耶麻登嶋根は榊葉さかえ花のことゝ伽羅はさかり
志貴嶋の大和歌は神の言なるを神の足なる
を神代より今のをしへゝ傳来り道は世々人な
らべて雲の書ゝ國と称へけゝを

芳樹は古風のたゝへあゝ初句七てゝ
おこてしるつゝ字と時を指を
榊葉さかえと河のていの
豊穂は七てゝ人をおとをる例を古事記を
日代宮は之ゝ所ふるこたれと榊葉
とゝいひつゝたるこゝを何とのあゝ記
や日

両説ゝあをとおのをいこれは吳服ゝ
由ゝさゝの以もんと抑ゝ所有
むゝ蒔垣内門下ゝて古風好むこの

多こうとさるこうまいと一のりさる代の
をふりは習ひて詠一つの時をきてあり
しう是其中の一そ一けりさて代るを習
をこ云四言六言七言おこさるさまく
ますく此歌者夷振之片下也此夷振之上歌也
と注一ものく志都歌天語歌天田振宇岐
歌志良宜歌なと種く注きりはたて白ア
あ一八音聲の上まいへる事とうんこうて其侍
後されいうるまと知ちるをと上歌片下な
といへるまてうひあるこるまるあり の曲調
なるもちるく一詩序云情動於中而形於言
言之不足故嗟歎之嗟歎之不足故詠歌之也
きをく詩の起原をいへるなきと人情不二
詩歌一般情念の一機より起りて詠歌其情を
やるまきく情をやるに至りてさいへる
のくまてハ和暢まるまさふ必音あり曲節
あるハ自然の勢なりかくはこ三言四云六言七
言ハ歌出るくまと延促長短音あり有也
言句も非る也或人云音声延促八拍ふまるく
なりとこの説はよくはこ形をハ声息の長なれハ
言句の長短はよくさるへ一ちるを法の一格を拠

して是つゝ見ては何をもてこの
宮むへき千廣ら此歌は神武紀なる菟田の高
城は雛羅張るとある調なれ〳〵へ當形容
歌の格調世〳〵変きり美美ふ五七とかく
きゝ古今集なるを至りて名言して七五をき
ふを拙くして強るあれは其格をかへらず
こゝなりさるを忠岑長歌を拙やゝ
思へるハ一篇なる着して時勢を省さる偏見
とやいはゝ〳〵もこの〳〵形〳〵短歌も
風格変きりこれ歌の〳〵なれは服色制度
皆〳〵文化年〳〵盛りなるを風俗沿革あや
しもなれは膠柱之説觸途成滞莫為容
易看この論辯なる且置長歌詠むはものの
七五五のつゝおはりのことを面れはは長な
ゝ〳〵ん〳〵さるをこの〳〵詠るなりんてハ殊更
上代代さして詠ることもいとをちなる事
なるを初学なるの歌を以宗匠の皆めんやゝ
なる論ハさして天下の先生とふいへかゝはゝ
いきこゝ形〳〵はや

楠公

みなとの　くもの時　うつりぬく　四本の唐木は
朝日さす　杵島をこえて　分日は　阿蘇の印山の
高山寺　うつうつとふ　皆人も　仰ぎてふる
楠　の　九月　き市木は　真白玉　うやうや光
久つの　日月さかえ　天の下　陰は掩へて
玉早　祝ぎまつる　立ちふ　物そなられ
出をれば　阿蘇の高山　霧ふり　きまの嶽を
うつ陰　うれの久めぬ　ことの本の　ひと枝かや
小枝かまり

芳梅さいひえそめ　やうやう思ふ必
この花は天翔り来て　ふるまふ
世一番ハ千廣君の　時の彩すて　潑歎
顔ふきとおりへ　かつて老ふる世公来后
の因縁一唱の下に　徹底あり　事ちを動る
ふるふりて　省きあ　ぬ時閑　公り　皆
ふふ　莫謗我や　呵　ふんや　更
慙汗背を浸ふ　よ
備後三郎高徳　のとをたてる
雨風の　ふるこそ　やうや霧の　掩へるそふ
て曙の　光もえ　木の根　言問中

一本所に詣でてあまた鳴くに採まく種き
建長の日本とそろひ名細しあり名細し
いそやその何りしさぬらハ春秋に花ちり葉落ち
に根さへうきしきえぬまを肝向ふこころの花も
美しよる散失ひして物部の臣のつら児と
学びて沢の多
大君の御袖の香なるまにまに花さくに地に落ちや
芳樹に西風の吹きよるそよぎやまぬるの
おほ国よりをとめ
忠孝にめてたし芳樹のいはれぬく何か

卯月のもとめつつこそ言ふ時の不動坂をのぼり
て詠める歌
高雄山や高きのしみ石の根の瀬を落ちる
うつほがくるわかつくもとは茂りそる杉の木の間より
棚曳る霧の間中も梢の穂までこえ匂へる
らの山の林をふかみ今もうら雪の残れる
此やまの梢をまとのこ時しくに雨のかくれる
雪ありハ風そまじりて雪あらは照日をうけむ
てる日ありて風やまず風のむさふやるかをとく
代らしくに名のまさへるこそのよし世の山も

古衣　青垣ことゝも
霍公鳥　初音なくなり　夏きぬらしも
あやめくさ　はなるゝ時ゆ　うとゝ言山
常世は　まつのことゝ聞るゝ

豊穎云かゝまて長き歌を一言も
空海の事をおもくる句なり　大うたの学者
あんしるかゝ　醜の法の沙と罵る詞あ
るべきを　いかれ君ら満腹の雅情こゝに於て
いよゝまつゝ　此評更よりこゝを以て歌の詞出
のらとゝ言る理の不動坂をのぼるかと咲こゝ
きてる樣のあるまゝこゝ言て思て思ふのをり
谷川は白ひゝる風情画まこゝまは
こゝりなきこゝ　沙ゝうくゝ詠出るゝ
のまてりとよりゝ大師貶剥之思有ゝ
事まあゝ次さゝゝ字大方の学者は
必ゝの法の師と罵るゝをゝいゝる
いかゝあや　このゝ沙とゝまいゝさる
学者をあるなゝ　むりの　のは花は對
して殺風景なる事ハ更まいゝ山

出りて其主を罵り憎まれ山に入へ
らるゝ入らもらるゝまをそらるゝ
被殺るゝ物狂おりき嗚呼ゝ
ゝや抑大師をいとのある人とこの国の諸越
ゝる三地菩薩と高へらるゝ
ゝを天皇の帝師ゝ仰うれ聖化千載
の流ゝ存ゝ所ゝ帰命渇仰の衆生
羣を隊を為て傾礼ゝ豈
おゝけの事なめや若それ大師を
識ん人ゝ真言乗命脉も更ま
ゝ五時八教の玄奥を究め純白無私の
上して識ゝ浅近の法文ゝ
いのるこゝ不知不覚底の小キ慢見
ゝ接ゝ嘗吐唾を生ず猶象
ゝ浅劣の限ゝゝ此識に於て
いまゝ多ゝ
家集に似ゝ説ゝ
ゝ但ゝの譬喻あり彼西洋諸
国のゝ今ゝ二十年前ゝ風俗
ゝ

醜劣の思をなすまでして屠者畜生
は比べもなきこれ今日今の事なり
彼の文明盛大智略
卓絶なる事を見悟して褒貶忽
地を換て彼の制度莊嚴を摸するも
是他なし
と知る差別の佛教
とやうに他なることを嫉むべきなり
聰明英邁の上流して一度其義を了達
とは取捨反轉して西洋の一般なるを
惜哉僧侶日々は隨順して導引建化の
大智識出現をまつなり

随縁集

随縁集　いつもつ　巻の巻

立春天

久方の天の八ちまたこうけむ神ら春いまそうく

若菜

姉らつむ垣根の口の菜雪ぬきさけて春をうんをるり

行路梅

うゝ雪の残るこの頃を打ちて伏屋の梅ゝまを見るうれ

仰の口評まきゝ〳〵ゝ法の御りの什うこゝち

して姿詞ゝろ

忠敏云めでたし初句白雪の雪しろね
いふは
如何にもおもしろき哉波雪するもあるべくや

湖上帰雁

近江の海さゝ波よせむ曙にいかならんて扇の中に霧
の五評は姿さへよろしなとと下の句
いかにするもいぶせしぬるし
此五評時の作者諸平伴雄ら一同ニ申候ハ
此は何処にもかへ合せしてこれぞ志賀への
浦てふ常窺の餘りとり出来しれの歌
なるべしあるべくまとかやといふ詞松陰
須の哉もいまだいふおもしろしと雅波賞
歌の詞とありしるめしありの合得りき

見る

春る風如何しとことのあふ物思ひあたるを見かひなり
此の頭云二三の句の情しき姿ありへけれハ
花の木とはふことはつけちきたる思はさて
もあらじとぬこともあらまし
忠敏云めでたし二三の句の情しき比ありは餘情
ありいかで花の木とつけたるあらむ

花有遲速

幣とちる谷の山口分ては雲ふかる水分の峯
山口水分吉野奥口の西社なりいくそ
ちとつゝ人もてのりかをとゝ注沢

深山花

雪こうをるみ山の谷の陰とゝ分き世をうとふ人まてゝ見り

羇中花

関こえて今こそゆゝ箱根山石ふむたをるををとゝ程
花のをとゝとる春ゝ山ゝ笛ふくゝこゝ
糸竹のゝ忘吹まよふ春風ゝ花を雪とちるゝん

豊穣ゝ二句のゝ吹ふゝ詞用なくゝ
ゝもゝきゝちゝ吹あゝたゝゝふゝ詞なゝ
忠敏云めゝゝ二句のゝ吹ゝちゝる云ゝ
雅宣云ゝふゝ吹ゝちゝる云ゝ
いゝゝの用なゝとゝいゝもむ
ゝふゝゝ用ゝ雪ゝ立ゝ
おゝるをゝゝゝゝふゝいゝて多く
をゝゝ同ゝゝゝ管弦の音彩風ひよ
なひてゝゝゝきをいゝるなゝゝ吹在
ゝもちるゝゝをゝゝ管弦のゝゝきゝ

さくひらき合てれい花を感ずるこゝ雪と
ちるぶんとゝるゆゑて下句に此胸句のまゝふ
より出るなり雪い音樂の感ありさまを
用ゐるゝゝもとゝ情なき評ありしやや
はゝるゝもう大平句をはめ諸平自餘
の作若同心ゑ秀歌の由覚覺あるを正句
もいゝゝゝものゝかな
名草山の花年比ゆゑ有りしを契りし人々
ゝゝゝ官ゝりめる春ゝ方まゝりさまゝゝて
今年はいとゝ少あゝゝゝ比色はいろのをとゝて

秋のゝゝ年の五を尋来ぬしまある方とゝやおもはん
芳樹ゝ三句素形ゝ
忠敏ゝめてゝゝ初句をゝゝとゝて
三句ハ形事のまゝ立つ生ぬとゝのまゝ
芳查のいゝゝ形るゝとく初句事のまゝ
素ゝとゝいてゝとゝのゝ形さゝとゝてい
下句の照應いゝゝゝや
忠敏の説ゑ流るゝ場はる

山家落葉

ちくふちる尾上のゝふし分ゝてうき学ゝ人ゝ赤ゝゝゝ

忠敏云いとめでたし——但この句夕山おろしと
なりぬれば
こゝ神さびいにしをもてなす
山路落花
さくらちる山路をゆくは誰ぞ旅人
雅宜云菅原道真遷于寧楽京時の
長歌なり吾ゆく川の川隈乃八十阿おちくまもり
顧しゆくあるゝ詞をゆくゆくとなるも如やうなる
萬葉なるの古言なるゆゑ用ひらるゝ成歟
の風骨なり

雑

打ひらけ丘の橘ちり交てつまもく雑の多いとむ形
雅宜云齋完空國自頓丘覓国行去の詞を
活用なるなり

春獣

ほとゝぎす堤の日新のとうまて乳乳むし牛の眠りもちある
あるくゆ四匂いの行るとて答乳乳むし点
牛のゆりをくゆ行て喰ひ物を吐出て再ひ
噛こなを云なり和名抄ゆくくこと

春海

墨の江や海生の干潮ひきつきて海のとあさる貝拾ふ人間

或問四の句いろふるとく〳〵ふ医学と云事を学あき

と云例あるを

新樹

陰沈き若葉ふるゆの落りえ黄霉る時雨まれさ見り

豊頴云結句いろいろいれてるるいきらやき

らく〳〵紀心地に

忠敏云りみちといひて雨も時雨まといへ

るまて紀長ふのいやありてよく学えるをや

この所評は若葉ふめきを〳〵きさ見ひお

をて出て〳〵〳〵

残花

学のこゑも紀こえて夜の暗ふかく色ふ雨て残る

加茂祭

諸〳〵かさ〳〵葵の葉ふ〳〵てのうこ屋きてゆく車ふ

忠敏云めて〳〵〳〵

草間螢

学ふ元何事〳〵のあるらんやとアてハおりひら貝や

忠敏云雄偉

瞿麦

四月の芦生の家にて詠まるしめ結ぶをあいれ撫子

雅宣云風情あいれもの

泉

石走る音ここひ汁村立の松のいつこう清水なるふん

夏月涼

すみ侘ぶ山ぞ宮の月清き松陰の風ぞ秋いなる

忠敬云清新

萩風

何方ぞ物いふ形となむれ萩の葉間の秋風そよく

豊穎云上の何のつゆもあきい二句あり記

といもきされいてこまを八とのもひされい物

ゆ形きとこ所ものきとこ又熱ゆ形き

と思へもこ所ものきとこ又熱ゆ形き

雅宣云この評め何ほこゆ得らきてく

いてるまゆあやきもの何ものる

物ゆ形ゆ物とゆ定きる結ひ

辞の格を角うへて交こる形ゆ詞の

玉の緒ゆあるれ出る格ゆて則證歌

数ゆ峯ら色ゆる中ゆ色ゆ人ぬ松

と行ゆ末のゆをいれえ人と君のそ

さんまとおく山のさま木の葉一のきふる雪のいろ〳〵と見えぬ程ふるこの梢まで物ふうの一ようまれなるなりもさるをまつもとくもきれはてたなはとそのハたそのふきとのはきもをしとハいふよ思ひ違へらるきふるみくいとあやしう物む

野月

立ちめ霧いとまて野月の埴生を厚ふ月の新うあ諸平云ふるひくをの

海上月

能登の八海語遠く入方の月おくへ宮ふ月陸

忠敏云雄偉

閑居月

なのまとを秋とをとぬ宿ふはちの月の新うふ

忠敏云趣ことゆとの事一結句ふ

このハまていまきこの

諸平云高一うへきはの月ふ行る

をまをまて秋ふぬ宿ふハとうへる

新古今の巧ていとをの一

寛月

いつとなく秋の月ほのぐらくて斜に竹の高さうつるを

忠敏云清新

庭月

限なく惜い庭は新屋にて新しう見る月さえまやう

忠敏云四句大そう言くくしてまた

叶所初句大言くと詠ずるを満年

ようてのまうるさうてやはもんくく初句

は対してあはよりやはいんといふるはきて

改めくる也今忠敏の評おのもしろ初句の答

合をくまをこのうれと好田ある諸平ようる

くく大言ゆ叶所ずして詞のくく少一事く

くく興ゆる

月前鐘

さよ中と更ゆく秋月の待のを空を数て月をうるな

忠敏云一二の句心ゆの

雅宣云一首のうへあくくかくして餘情あり

こゝ少秋中と秋を重めふしといふる事歟

くくさてるものをや

月前鹿

油さしつる月のゆくへをなつむれば尾上よりこる紀伊藤の聲

野亭持衣

秋さむき吹来の庵のさゝ紀植まるこりて夜ゝ冬ゝあるを

水邊菊

白菊の下ゆくみづはさやかに移るをきゝて伐そとめる

暮秋浦

緑毛千代苔屋の軒の夕附日ふかくさびしく秋ぞ暮

ひの所ゆよもゝゝめてゝゝ

忠敏子めてゝゝ結句ふるゝ秋ぞおもふくゝや

閑居初冬

あゝゝなる南枕よもゝみておつるもちをひとりうゝ

山家時雨

そゝもちをのゝきしの雲掛あへぬ時雨をぬきて人いきまるり

雅言子初冬の章況いとをゝれと山家の

さまを今のしほゝゝ

忠敏子いとをゝしく山家のさびしきものをや

岡義巣

当国住ゝゝゝの岡の榎原張をはゝふまる本居氏

忠敏子実景ゝくあんある

千鳥

袖さゝぬる月のゆゝしさなりむれい尾上まる紀掃部の詩

野亭捕衣

秋さむき吹寒の庭のさゝ紀植まるこりて夜うつるを

水邊菊

白菊の下ゆゝ多八まやを移るまをれて武蔵をとめる

暮秋浦

紅葉千代苔屋の軒の夕階うふさひくる秋氏なるり

四の所浦まるの秋氏苔屋の軒の夕階

忠敏をめてゝ

閑居初冬

結句ふゝる秋おなるくゝや

あゝゝなる南花まゝ

みておつるゝちをひゝうゝ

山家時雨

ゝゝちまるのゝきゝの宗下掛あへ時ゐまぬきて人いきまるり

雅宣ゝ初の京の章況ゝをゝゝれと山家の

さゝま今のゝ

忠敏ゝいゝをゝ

ほゝゝ月

岡義業

山家のさゐふゝきゝのをや

当紙ゝゝゝの岡の榎原張まほゝふまゝる本義ゝ

忠敏ゝ実景ゝゝあんある

千鳥

波の音はやうしの白波立て乱るなくなり
諸ぶ云四月いひ〜らしめて〜〜
忠敏云豪壮

月前千鳥

村ふる浦つ〜ひゆく新れいさ前八月の光あり〜〜
忠敏云新鮮

湊ふる

夕されいなの〜〜波の手束弓雄の水門はちとり鳴あり
雅宣云紀の国雄の水門ハ五瀬命の雄詠ま
〜知あり〜〜故事を思ひ出て手束弓の句を
いまれ中〜〜力あり〜〜

埋火

さえつる尾上の滝ハ音さえて埋もれぬ園のうち火
忠敏云をこり
雅宣云暁うけて雪やうんとゆる本形を
ふまえて巧ひなさ〜れ〜〜いと面白

鹿狩

踏〜〜るうり場の雪ハ跡つきて〜〜れあるそく雑の篠ま
雅宣云紅白のいろをそ〜〜ふ中〜〜いと
をこのき狩場の片〜きや

忠敏ニ豪壯

冬花

小堤のうれ生の底の鬼あさ〻草まだたゝぬさきあり

冬野

名殘ありつゝふる〻樊にて雲はうつとみられまを〻

山村冬

雪ふる〻行の林も柵曳て人まちほのぐ〻みちの角

藤垣内為十三回忌曉懷旧

昔おもふ有明うの燈のくてまゝこゝをたれまとゝ〻

忠敏ニ感情ふう

懷旧

立〻くの多〻むかしを去るのハ日〻を疎とたれらハ忘

忠敏ニさ〻るものハ日〻をとゝとあゝくや

雅宣ニこゝ去〻るの日〻疎とゝ〻る古言の

ゆゝを稲されハりとゆまゝて有めゝ

五月のおつゝ毋まつゝをて

作ゝもゝその消きゝれてさ〻れそく我袂ゝ形

忠敏ニ行ハれふう

同一月知さゝるをゝ〻なひて

ひゆゝなき本のつゝまかけそへてゆゝ袖めゝ末の為ゝ形

忠敏云けとおりれなるを

弥生末はつかた幼児蘇丸か身まかりし折よめる

若波いかにきらす宿の梢うへまてうつるの際の何残るらむ
ゆふへ又手綴やさくる人もかし丹波の神まさふらむ

忠敏云けと何けれなるを

道

岩か根の瀬しき山の岩根路そふみをはなきて人かよへにや

市

桂市の八十のちまたまてもち出て家むしむらふくむら那

南

かつら城の山こそんれい新面の木の國京てもしさからんる

遠

むかなきい人のこゝろの詞の爪筆石ほうらとけらよしあ新く

雅宣云桃詞なきさふぬさまよしいなさんあしける

なその

少

小萩ふかき宮の宮の桐火桶おもるけらよきそえのこゝろにてく

忠敏云なその

雅宣云蛍の光宮の宮まかへよいつり

青

石間ゆくみどりは翁にて咲なり清き山藍の袖

此の句評に初句岩ほりるとなりけり

黄

山吹の花よりは深華の陰てもあめのまやくれなん

此の句評に桜を花まくへ　云々といふ詞軍

翁評にはこれらそれふさうかやあらん巧なるは

さもあるも

北山に雪流とゝふ船あり流れて川になる紀伊

岩穂こし友立草てる句なくなきりおち彰

しきは山岸の苔より出之にけりおつ瑞くて

時しらぬ松の木の間の雲しつれ露にぬひてなれてにほふん

諸平云上句殊によし

同じ君なる庭きくにゆかしき夜

滝の上の藤のしぶみ風とえて月になかる掠廉の影

諸平云いとめでたし　詞めでたし

忠敏云めでたし

まつの秋おかし　九廉きくにゆきけく

夕やみのこやまくれの廉の声を月とて空に語ひ出たれ

忠敏云幽艶思やかなる

長月つゝり紅葉ふるやまかぜ山路にて

なゝ[illegible]く山路を西尺紅葉を踏ふきしかなを来たり

神無月の中め狭日廉雨にて

りゝち葉ふるかぜとめて能階寺刺寺八ゝとすゝ

山家

山里ハ花ゝそさゝの冬ハ木ゝのこゝろ寂るる友ハあらじと

山家雪

ゝ[illegible]のたのゝめゝ[illegible]むゝ我住ゝ[illegible]ゝ雪

九きめゝそのゝハ彩諸なゝ[illegible]ゝ海苔の事ハ[illegible]

忠敏云けゝひまめてゝ

山家水

有ゝ世ゝ琴のゝゝ[illegible]ゝ山下水耳別なり

時ゝ琴若ゝ[illegible]ゝ[illegible]を蒔植

内苔ゝ[illegible]ゝ[illegible]て深養父ゝ琴のゝ

さへきゝゝ地ゝといいゝ世ゝ

山家鳥

層ゝ[illegible]ゝ山里ゝ時ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

冨士崎の源僧古岳函居十奥の[illegible]

[illegible]ゝ時ゝ[illegible]

牡丹

人とふぬまの屋のはつらまるき雪を待る姿とも有

郭公

なるき人雪まふれの彩あるへ人あひなるふれを迎

鹿鳴

対ひとつの秋のうき世のふれる指まくとよ掉廉の彩

望山

山ふつ更まり人の稀ゝ世おちよりるまるの旅る

耶の四海は退陣の情さるまるをあん

聽水

乘ひとふ作ます乘とふ山下みまこを石の作り

以富士峰とりつを紀の川は臨ゝて富士の形ある

岩ありいと面まるまるるる可法の川

ま琴を彈をれいまそるもしうくいよみ作る

長歌

行路難二首

海西は波を荒ゝ山ゆ者は岩ね激ゝ

まゝとそ山やとをえぬ海やはのぬ

浪うきの まくるまなけ石のるの さやるまなけ

とまうくる　苦まるのわが学の井のうち

其二

天くれは　あゝ静かに　地くまは　はちかな広原
月又秋は　月はさやかに　花くれは　谷に勇ましく
酒のめは　うたて楽しく　乗くれは　あられ折わ
世の中に　かくあるものを　何ゝらも　くるしむ
ほうきを　求るうたてりこそ　さ

豊穎云ことあるよりは世事悟いひたく
さもとめて世事悟いひたく
忠敏云かくめてこそ

花下宴

昔の根の　永きを春日の　さくらの　愛のほうと
思ふまち　宴してあれ　何のけ　うま園まる
風流男は　次や乙女ほとに　庭原さ　遊の八塩形
満汐出　こちくへ　ゆるりくる　めくりしかれ
淀川の　くもむひまなく　伏見ゆ　浪華まくり
名屋西も　好くるのほう　苦小舟　流さくまく
さこの住りめくる　数くく　活出る　陣のさくあは
引ひたく　をやふうる　年つ　をやらくの女
天地は　こくひぬ　今ゝる　何うれりいむ

風ふくは後ち吹し花ちらハ落めちるし
ちる花の乱るゝ中ハ黙ゝと居て猿ゆ似たハ
大伴の前の君すや笑ふ人笑さゝは
家めきて笑ハさんてふ肩衣はこれなぬきても
よし恋やゝ晴候もんやさゝ公共はや
豊頴云 ちるゝてへは少らぬ句ゝちハ自我
の詞なれハ済のよすてハみてゝゝへの方なる
るゝや
又云 笑さし肩脱くを対しの人ゝいて見
まくらの所あるゝめつらしくおぼゆ絵句催
馬楽の詞まよしれゝる面白し
忠敏云 雄偉縦横変幻奇巧

立春

標縄の歯朶のゝし葉あらゝ清くうち靡きて春ハきるなる
この口評歯朶のゝし清くいひくゝし
とゝりし
忠敏云 流暢

山霞

松の雪ほてゝやりつこゆきさゝれハ霞すきえぬ山のはなかし
忠敏云 雄偉

閑庭梅

おくゆかしむあるものハ古くよりの新潟の梅なれ方ら

春雨

梅の花ゑ雨ゑ雲掩ひ来くゝえてきゝ雨てゝ

四の句評よめゝ侍ゝれて衣ゝ着

ゝとゝゝる雨抜ゝきこゝ雨

四評如此なれと時の作者一回中侍りゝ

雨句も日本武尊るの作ゝくの衣ゝ雨を

とゝゝるまゝゝ雨る雨るれハ侍ゝの力ある

さゝ雨なりなと評判ゝ一ゝ雨すゝきゝ

ゝゝ侍ゝ雨

糸櫻

打靡くまゝの日ゝの糸櫻朝つゝよゝくゝ雨ゝきゝ雨ゝ

四の句評ゝ珍ゝく侍ゝ二ゝの句珠

ゝなゝの

緋櫻

うゝ宮の神代の光思ゝそゝきゝゝ本の雨ゝの花ゝの公

卿の句評神代のゝゝるゝを侍りゝゝゝ

なゝゝる上雨の日つきゝいゝゝ

古宅花

あゝゝ世の美下

のはりはまされて強ちやれに屋まる昔所まいの高さ
為百合
立ちてなりれとい人咲為の本の日まるたのとちて始く
雅宣云あとちてとい人の物ちまつをそ同
さまるいとへまとるをとい人をとこ八猫楽まいふ
ことあるを形まもめて
燕
人いさ為やつき山里の新猫つとれぬ住をとめる所
豊類云初句八貫之の形まるとく人八
いさとに人のとまれいるまとちまは猫

いるいるよ
再按この為のもハ故万のやつまとるもむ
人らまとるまて初句八燕のとさまとめる
ひ人られるけりて初句の詠八あやまりぬ
忠敏云ゆえ
山家首夏
山里ハ今ことハめてきハ猫あぬ花のそるなくなり
新樹勝花
立あるいるるまは深のとるの多ちきぬきら所
待時鳥

ほとゝぎす月東西東とゝきあはせてゝる今はまし

関路子規

清見潟西の海の波の下ゆ出て関山ゝゝ霞分る雨

忠敏云流暢

雅宣云驛路鈴聲夜過山の文句よくふれ

ゝるまや忠文のたゝすきへおりひ今ゝれて

いとあはれなり

古寺子規

西ゝ月をやゝふゝ忠る夜ゝまる雨ほとゝきゝ分る

夕早苗

夕ゝけてとゝし門田の苗ゝ月とそゝつれなやみゝふん

夢ゝ顔ゝ月ゝそゝ八月とそなひけとなる

ゆふは

世評の如くもいゝをとゝまとゝたゝ今まとゝ

しさゝへよきゝゝ月のゝつゝるを見て

まや家のおきゝたゝるとゝ見るたゝ忠ゝ

ゝゝ詞ハ換ゝ

川夏月

弱ひやゝ夕川の涼ゝ

雅宣云三の句さハきとなゝまゝ

さる月の影さへゝゝ山ゝ

池夕立

こほれきて蓮葉ふかく夕立の庭の池水

松下納涼

陰きよみ涼しくなる夏とはいゆめる面影松の秋風

忠敏云流麗

水鶏

川そひの柳のもとの白とは菴月はたきてゆく水雞かな

或ものいふゆくふとふ紙とそふくひ形ち

往来の姿さくるまよとの戯なるべ

されとゆくるとりたきてゆくとむとる雞

あうるるとりとの

鵜川

夕闇のはしそとるれ時波高鵜飼伴よもやうりさを

忠敏云雄偉

雅宣云古事記兄師木弟師木を撃ふ時

の四部をとりておをしくまよれうう

夏居所

菟道川やうの都すまそまるえてすまくほまるの言ふ所

法平云字治矢砌そのふることを云えてをう

忠敏云流暢

夏神楽

賢木もる波のしらゆふかけてけふあそよ河社なる

幽　栖秋来

さびしさの行くゑもとはしらぬ秋と鶯ぞなくらん

忠敏云幽感

連夜聞荻

さとそよぐ夜ごとの荻の音つれなくあらまほしうらみ

田家月

山ぢの蕎麦の花ちる秋風ふきてぞ有明のつき

幽　居月

このきこそるめくりの行の一言埴月さらけの感ある形

忠敏云幽情

月前雁

うしろ姿ハ羽をまとれて山のはの月も針ハ居そおちくる

けの口評ハ如ありてと存

秋の哭る猟人ぞそなりの

猟人の名ハ打ちまとい荻原ハ床ハ打ちまとれてまあちどそ

雅宣云名打ちとハ出そて鶉の

如をちなそ打ハ居ハ出ことなりとそ

山中秋興

奥ふかきのうち寄ぬて拾ふの事とふ法は家まもるの
法のまことをこの
秋香

松山の一夕朱うとしの加れ笠うゑ風もまたはるる旬ひつ
秋幢

夏陰の萩の葉風まもりきて掃えひ庭のとの火
忠敏云なをこの

河霧

樹ふかく行しの末よ波うえてたえくもて住係の河霧
忠敏云雄偉清調

暮秋

小の〻形く岡辺の杉の一叶るるとふ秋くれまるり
雅宣云四句その色とふ紅葉のこゝやゆ
物遠く鳴くゝ住るとふ耳まや
忠敏云生色とふ紅葉ふのこの杉の時分て
めてみくるゝまたまるをいへる逸云佳

山村初冬

山里ゝ椎のこやを色ひてまゝ見埴ふみ窺をを
岸葉

秋くれて家ゝいつ〻ゝ葛体山やゝ色ちるふ

忠敏云めて高き一新古今の調うまく詠
ひ出きたる
冬動物
寒くて鶴さやうに音たてゝ鳴やゆくん
豊頼云寒くて鶴のいとうるさいのよいまれ
守つゆ心ちして崩の高ふくこゝ西わ
活く詠るきこゝ云へきこゝ
此評の崩のこゝ高ふくこゝ蹴なる
和行下二段の活よくこゝるくこゝ
ともこゝきて植飢と同格なる蹴なりと
云いこゝの約こゝ也歌ハ朝狩急く約の云ま
を激しく音の活やうゆゆるきこゝ也歌
人のいまの詞ものきけ閑はをぬいちきこゝ
こゝ詠こゝ
はきれと初学の詞の活こゝきるハ
百首よ一そこゝ可なんゝ
池水鳥
陰のき弥山の池ハ樓の実ま水こゝむ中て鴛鴦むれる
鴛鴦ハ樓の実を餌こゝ山そはこ
来こゝ池ま入りて出こゝ

喰ふ西瓜は櫃のもとに出てみの多黒くなる

なり山遠く隔てる住人ひとくまもぬを

なをとは住まる形をを

忠敏公新奇

狩場嵐

かりくの射放川かつまるかく穴をまきて嵐ふくなり

雅宣公武風体菊さうるを此絵を詠

さてる骨格かくを年

雪中千鳥

下松の松のゆきまもれて海先のる音雪とちる鶴

諸平公松のゆきめくを

忠敏公風情をこの

寒夜苦学

読書のこゝろとゝぶ夜更て油さへ凍るこの火

忠敏公ゑをこゝ高ゝ

志りけるこゝ諸平尚忠を訪て語ふほ

とゝ夜ふけ〳〵雪いこゝ海出をを八雪の叔

しつゝかゝる学ゝてゝ学をもとて

学の庵の昔の面かゝ出て面中かゝして夜の雪

雅宣公白氏の詩をゝれてゝるこゝ

雨夜の吳竹をうりて雪をあつむる窓
のもとのやとるハいとゝ美の花を法
うりんとおりひやゝを付る
忠敬公をこゝ
高野の冬をとゝゑる
降つる雪ハ花ま与ひ土宮よ搦きゝへ酒うゝみむ
山さむみ冬ゝ和ひりの宮ゆゝ神の宮ゆゝ戻すつ
雅宮ゝ古宮宮ゆゝいつれも徒山のり
なめきも打ゝふのさまいひおほをめゝ
この形ゝ

冬祝
なりゝたのまゝ有里の寿ゝの実の花をきゝいのる成寿
住吉のまゝうゝて
君ゝ世をゝ代とのをハ墨江の神すゝ住る松のをゝゝ
玉津島
みのゝ浦ゝ君ゝ代の光とゝ出るゝ美の玉ハゝま山
菅廟
さゝはの御ゝの袖ゝゝ紅ゝ葉ゝ袖ゝ秋の夜月
忠敬ゝ感歎不少
詠史

天の下てふ所名の四ちうを縮ひ寄せ見初けるか
雅宣云初め宣尋の夜見の夢のうるの乗燭をは
一をは楯ら見る夢るなんそのゝ光りの天下さ
てりこのよいめるハはるの歌の如く仰られて所へん
幸遇太平代
二神のはてゝうゝめ一浦安の国の君ゝ世ま有る所
太刀
焼き刀の巻倚の鞘の海つ和ひあるひ世ゝ世ゝいや
雅宣云まハ海賊の太刀をよまれ所へ
ゝゝれゝる今の世ゝまみたちの光ハゝるひ
ありてゝそ
忠敏云新奇
弓
世を治るまゝて武雄の丸木弓ゝの所ゝをきめて
井あ云めてゝ一
矢
手束弓ゝを四目の高ゝさやゝまゝ進ひ世を屈ゝる所
硯
ゝゝや世をてふ所ゝうハ所ゝるゝすゝりの海ゝもゝるん
筆

命毛も功をつる事あれいろ矢をへてとろへうりゆう
卿の品評は初二日ゆるえつて右等なるよ
職ちつはさ我
品評うつあきて時の作芸等ゆて云事はものう人の存よ命毛もきき投ちへるものへたへ
はい物部の君の存よ弓るもの沢尺といそもむよ
似つりさる事あれはい弓矢は添てとろへき和
そとのこふはおりてすて武士とても一向よ武術
のつ時は文事をも兼へきものと雅情なおも
いきつつて陸ふよくいひおほをそやあ
らんなと中合付をたは打ち拾はて一らく
ちつよ命毛を存をるもの事

墨

後しろのつさらの松のうは煙ものはやしは打廃きつく

紙

すきとなる氷のうはらつきて斐の唐紙やはくて初むむ
雅宜玄斐文のうはつつとは今いふうはやうはりとそ

文字

吉事をうつ絶ををとはるをきはのめはひは綴連

画

こきあつる音のしきりおのつから時とたがはぬ象をつくん

諸平云いとせてのつ

伯夷叔齊のつくる

玉巖のりゆるまに日を山家一世を秋風の吹とをひつ

法ゆ云初二句いひえてをの

項羽

清そのゆくへをきかをはるの函谷やそをきん

東坡のつくる

山西のくりうち形るをの月笠きるとまを海ひまやる紅

漁翁の歌ま

人々の問ふをぬ海ほとれて つの世を舟まを つる翁

六歌仙のつくる造りとをのる松蔭を

をを名きをゆるなまりと世のくをさをひまま

ひりをををて小出降るうち来ぬるうへ

をの義のむつたまをひていのくさへ君ますをふれるう

和歌ふの移りをものをををゆる中は雑賀踊

左目廉和や渚ゆををるさら波却をるさやうちつりつ

保倍武者ものまくに並行を

世衣ゆけ背ををるゆうを君ゆるをやこあをおつむ

朝野僉載をつまるよいもく滄州東光縣宝観

寺常有蒼鶻集重閣毎有鴿數千冬中毎
夕取一鴿以暖足至曉放之而不殺自餘鷹鶻
不敢侮之とかもむとえてる事ありしを回
さきあることもあり左日廉の磯山は雪はて
夜宮ゝゝ鳶を捕へきて見たりゝめたりる
あゝゝ放ちやりてすると白いせ鳶の去りし方は
内のひとりもむ出てやりたりてるて
蒼さらの一枝きねのめるる方はてゝて浪い安をれ
高はすまるあるものをるるたよりてあるあや人の方りて

鶴

いあるきるあるきんのゆゝきて思をいるを田をて知る

馬

茅根坂の坂路とえやくはゝこ馬宇春おうをてるるぶん
畠山重忠ら生喰のこるをきゝゝとゝる
数まを那くる中を流のるのこるゝゝをるるくをる

犬

うゝなき新るなほえて支犬の物あるほをるてつる

嵐

きふの壁のうちを通ふるれ出る宿ゝゝ面
忠敏云四句とをれいいるるをたゝゝら

松

益良雄らみな〳〵利仁武隈の松たる歳をいろ重ねやと
忠敏云めでたき松なるべし

竹

大なる木をたきて吹風も行きやらぬ音いとゞ
合歓木

妹と家のはひりの吹るを笑ひ合をかつらいさらをみん
雅宣云り音のまゝにかつらとあるべし
古き例ありて今まゝ甚文字のいをとると
なきまでなるべし乎

知家の形よそ〳〵妹るにかつらハ告やん
形見の如〳〵この花咲るとりとるんえさうかつのの
名全〳〵杜撰なるあゝさるべし

薔薇

雅宣云麝尾頭竹葉經春熟の句を用ら
麝尾の味涌春をへてやきたく咲の花を出るなり
弥生の比里田川まて
いのよ袖のおひをゝをもをなるちるなるなる
若ふ月まこの浪若寿まく

名所ありしかども荒はてたるきのふの世まで
忠敬云めてしるしたる
卯月はつうの神まつりて
弟杉の木の宵の月新更て夏の来るを山のはの月
八月十五夜の野の天徳院あそびて
ほこ杉の木むら暗しとうらの向ふ杉まつ陰こそ見
同　夜鹿をきくとて
月は照る鹿の声とめてなかむれい杉むらぬ山のはなし
沙門実雄云は三首高吟の実景眼前
ふるさとの

過實雄師も和歌山勢濱中なる長保寺の住
職なりいまゝ在俗の時よりおのれとおのこと
をつゝ一人なるゝ柔和如法にて欲ハ天資
非凡の作家也つゝ年はさまゝの作者をふ
は此師のこゝをふかく惜るなり三年まして遷寂
をゝ世をとり迷稿をのこしいそ板をと
ゝりて二夫の光を世を照さんと思ひなる
いまゝまゝ作してくちをしくもあん
忠敬云る世三首とるまあてる
同　山なる嶋津義弘朝臣征韓の碑を見て

孤鞭のみりさ弛ゆるしてさゝまはるゝハうの石文を見
そらみをうけておりへハ泣るおもひへを石蔓まの名をおひえたむ

古戦場

桶峽むかふる雲のいつこまで山裂とゆり沈ハおちたむ

諸平云當時の勢ひ見るゆゝ

口蜜腹劍のさいゝろを

志茂原なるやをゝ心やよ幸雄の弓矢なることゝ

諸平云いかゝをこの

人生知字憂患初

竹のゑハ衣めくはるゝ故ゆゑりとのうきふやや今をゝらふむ

七箇國合格受領の參議まちゝるゝおゝる

とゝふ事代

七ゝのゝ玉をたゝぬくいさをこそよる有ゝき例ありたゝを

及第ゝる學生おゝるとゝふこゝ式

富の内を集めゝ光のゝふれてそゝまてゆゝるゝ

人のをゝとゝゝ樹ゝ雉川きゝおこをたれハ

むゝきゝのけてゝ柴ゆむをひゝるゝのゝゝ見ゆ

こゝをゝゝ松ゝ枝ゝ里方ゆをゝ法ゝ

ゝゝき松のさ枝のゝをゝ

諸平云吉野の山はゝゝ

宮のうちみの出まもあくもむすのまをしのひ
てそこ〜やゝ添ておとをたさは
ゝしの山むの巻を思ふさてのあるよはのこれる風うちゝらも
天保十三年十二月五津嶋社ゝ拭出ゝ畏ゝ大
御製を納ゝ奉ゝを拭ゝ中あゝ侍ゝ八古今集俗
らきゝふおかなりとそこれをもて七日間神事ゝ
廿三日ゝ〜ゝ〜ゝ事ゝてゝ日ゝ〜ゝ〜ゝ
ゝ〜ゝ〜ゝ前ゝ仕ゝ〜ゝ〜ゝ物ゝ音ゝ〜ゝ
風ゝ〜ゝ〜ゝ祝詞ゝ〜ゝ神ゝ〜ゝ〜ゝ
畏ゝ〜ゝ〜ゝて

和ゝ〜ゝ〜ゝ渚ゝあゝ〜ゝ芦鶴ゝ〜ゝ弁ゝあゝふゝ〜ゝ〜ゝを見
殿ゝ〜ゝ位進ゝ〜ゝ〜ゝ猿楽催ゝて
為ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
月ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝて〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ雪俄ゝ
降ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ本ゝ〜ゝ〜ゝ白ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ千歳
〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ面白ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
〜ゝ代ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
忠敏云めて〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
和ゝ〜ゝ浦ゝ〜ゝ東照宮ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
橋ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

君ら世を老をぬ橋をつくりかけるのちふ波ちの人ちは

大御世壽

玉章祈世をきらぬ品世をあひて天の蓋人いろまたらむ

隨縁集

隨緣集

上

914.5
D34z

095939-001-4

914.5-D34z

隨緣集

伊達　千広／著

上

M27

DBR-0176